

内容紹介

福島県ではイノシシが増え、人里にも出没して農作物を荒らしまわる。その一因は原発事故にあった。地中の食物を掘って食べるイノシシの肉から高い放射線が検出され、国は出荷制限を決定。猟師は猟を諦め、激減。農家は「なんとかなんねべか」。罠猟の名人が呼ばれた。一方、帰還困難区域の草原化、放置されたブタと交雑したイノブタの繁殖も懸念される……。福島の実態を破壊した原発事故の現状と、イノシシに線量計を付けて汚染マップをつくるなど様々な取り組みに着手する人々の姿を追う。

初出

朝日新聞 二〇一三年八月九日～八月二十五日

目 次

[第1章 だけえな、こいつぁ](#)

[第2章 数センチ単位の知恵比べ](#)

[第3章 顔が違う。憎めない](#)

[第4章 おたずね者の懸賞金](#)

[第5章 じわじわ上がる線量](#)

[第6章 あれはイノブタだ](#)

[第7章 大繁殖は幻か](#)

[第8章 草原化する故郷](#)

[第9章 何も残ってねえよ](#)

[第10章 しっぽ振り、目前に](#)

[第11章 電気柵ぐるり300キロ](#)

[第12章 山を離れたマタギ](#)

[第13章 線量計を付けるには](#)

[第14章 即座に「やろう」](#)

[第15章 人間が加害者なんだ](#)

[第16章 人と獣の力関係](#)

第1章 でけえな、こいつぁ

2013年7月中旬、福島市の日向山で、本田義博（ほんだよしひろ）（70）のイノシシ狩りに同行した。

本田は罠（わな）の名人だ。昨季は68頭のイノシシを捕獲した。おそらく福島県内で並ぶものはない。

うっそうと茂った森の中、けもの道をたどっていく。と、何かが激しくぶつかる音がしてきた。

バン、バン。茂みの向こうだ。「かかってるす」と本田。

茂みの先の小さな空き地に約2メートル四方の檻（おり）があった。中でイノシシが暴れている。バンバンという音は、檻に体当たりする音だった。

体長1メートル以上はあろうか。4～5歳のオスだ。

「でけえな、こいつぁ」

格子ごしに獣の顔を見ながら、本田は満足そうにうなずいた。

福島市では東部山地一帯にイノシシが生息している。それが最近、山間だけでなく市街地にまで出没するようになった。水稻やタケノコ、イモを食い荒らす。ミミズを探して土を掘り起こし、あぜ道を壊す。

市は狩猟者に捕獲の協力を求めており、本田はその1人だ。

12年度、市では144頭と前年の倍以上が捕獲された。にもかかわらず農作物の食害は増えている。

一因が、原発事故だ。

基準を超える放射性物質が検出されたため、イノシシは11年から県内各地で出荷制限の対象となった。捕っても食べられない、売り物にもならない。狩猟者は減り、もともと繁殖力の強いイノシシの増加に拍車がかかった。阿武隈山系にいったい何頭いるのか、推測さえできない事態になっている。

本田からの連絡を受け、間もなく県農業総合センターの木幡栄子（こはたえいこ）（37）が装備一式を積んだ車で現場に到着した。

木幡はイノシシの生息状況を調べている研究員だ。麻酔銃が撃たれ、眠ったイノシシを檻から引き出し、耳に発信器を取り付けた。

ふつうは捕獲したら猟銃で眉間（みけん）や耳の横を撃って殺す。しかし元気のいいイノシシの場合、行動を追跡するために逃がす。

麻酔からさめ、ふらつく足取りで山へ去るイノシシの後ろ姿を見送ると、本田はいった。

「さあ、次行くべ」

第2章 数センチ単位の知恵比べ

罾（わな）猟の名手、本田義博（70）と里山を歩いていると、農家の人が農作業の手を止めて歩み寄り、礼を述べる。

「おかげで助かつとるよお」

70代の女性は、家に呼び入れ、冷たいお茶まで出してくれた。

「私らが嫁に来たころ、イノシシなんて見たこたなかった。それが今は、すぐそこさ歩ってる」

姉さんかぶりを脱いで汗をぬぐい、裏山を指さしながら熱心にイノシシの被害を語る。

本田のイノシシ猟のキャリアはそう長くない。

福島市渡利の生まれ。地元の自動車会社に就職して、ずっと車のセールスをしていた。20代のとき、知人がウィンチェスターの散弾銃を「買ってくれないか」と持ってきた。

それがきっかけで狩猟をはじめた。当時は福島でイノシシを見ることはまずなく、休みの日にキジやヤマドリを撃つ程度だった。仕事が忙しくなり、銃は手放した。

5年前に退職後、罾の狩猟免許を取り、再び山に入るようになった。

本田が使う罾には三つある。

一つは箱罾。重さ数十キロの檻（おり）を運びあげ、仕掛ける。もう一つは足くり罾。地面にワイヤの輪を仕掛け、通れば足に絡まりつく。そして最後は囲い罾。10畳をこす広い敷地を鉄柵で囲んでおびき寄せる。

本田が得意とするのは箱罾だ。

「簡単には中さ入ってくんね。知恵比べっす」

フンや足跡からけもの道を見つけ、近くに檻の置き場所を定める。おびき寄せるため、トウモロコシ入りのエサを点々とまく。最初は檻の周囲にまき、数日かけて少しずつ檻の入り口から奥にずらしていく。

警戒心を徐々に解き、奥まで入ってくれば仕掛けに触れ、入り口がバタンと下りて出られなくなる。

1度に7頭入っていたこともある。だが、仕掛けの針金の位置が前日と数センチ違うだけで来なくなる。

イノシシは土に体をこすりつける「ヌタうち」の習性がある。本田は、いかにもイノシシが好みそうな泥風呂のような穴を近くに掘る。これもおびき寄せの手法だ。

怖いことも経験した。

足くり罾を使った時のこと。ワイヤの端を木にくくりつけた。ところがイノシシの突進力で木の根っこが抜け、こちらに向かってきそうな勢いになった。このときは別の木にワイヤが引つかかってくれて、なんとか捕獲できた。

第3章 顔が違う。憎めない

本田義博（70）が5年前に狩猟を再開したきっかけは、実家の畑がイノシシに荒らされたことだ。ジャガイモや豆をつくると必ずイノシシにやられる。散弾銃で獲物を追っつけた若いころを思い出し、駆除してやろうと思った。

罠（わな）の技術は本を読み、仲間に尋ねて、一つずつ覚えた。最初はなかなか捕れなかった。山に行っては、空っぽの檻（おり）の前でため息をつく日が続いたこともある。彼らの行動パターンを知ることが大事だと分かったのは、だいぶ失敗を重ねてからだった。それからは確率が上がった。

年間50頭以上とる本田のことを聞き、福島市の山の中腹に住む農家が相談にきたことがある。「何とかなんねべか」

イノシシの農作物被害があまりにひどいと嘆いている。地元の猟友会の人が檻を置いたが、3年かかって1頭も捕まらないという。

本田が見に行くと、大きな足跡が点々とある。直感的に相当知恵のあるやつだと思った。これは根気よくエサを食わせ、警戒心を少しずつ解いていかないといけない。

本田は毎日、山に通った。どこに寝床があるのか、何を好むのか。観察を続けた。オスは縄張りを持ちたがり、ヌタ場を探す。油のにおいを好む。

結局、最後は本田の罠に4頭のイノシシがかかった。最初の2頭は箱罠で、後の2頭は足くくり罠で。くくり罠の最後の1頭が一番印象に残っている。100キロ近いオス。すごい迫力で近づいても動じず、じっとこちらをにらみつけている。鋭い牙は上にぐりりと丸まって下唇に触るほどだ。そんな牙は見たこともなかった。

殺処分したイノシシは、ばらすのがうまい仲間のもとに預ける。脚をつるし、頭の部分をきれいに洗い、順にばらしていく。必要な部分をとると、後は丁重に埋葬する。グループでイノシシ鍋をしたいのでと頼まれ、1頭1万円で分けたこともある。本田のイノシシを待つ人で順番ができ、誇らしかった。

原発事故後、猟仲間が次々と猟期の狩猟登録をしなくなった。捕ってもどうしようもないのだ。自分も迷ったが、農家の助けになるし、イノシシとの知恵比べが楽しかった。

イノシシは、みんな顔が違う。本田はそんな彼らが憎めない。それだけに、自分の仕事が増えていることに複雑な思いがする。

第4章 おたずね者の懸賞金

本田義博（70）は罠（わな）猟を始めてまだ5年。その本田が頼りにしているのが、猟友会仲間の佐久間貞二（さくまさだじ）（71）だ。

罠で捕獲したイノシシは銃で即死させる。本田は銃を持っていないため、とどめは仲間に依頼する。苦しまないように一発で仕留めるのが腕で、それができる一人が佐久間だ。

佐久間は本田と同じく福島市の出身で、狩猟歴は37年になる。ライフル銃を持っている。県猟友会の福島支部長であり、有害鳥獣の捕獲隊長も務める。

佐久間がよくやったのは「巻き狩り」だ。仲間15人ほどで山を囲み、無線で連絡を取りあい、犬を使って山上へイノシシを追いつんでいく。

かつては猟期の秋から冬に、十数頭を仕留めた。1日で3頭とったこともある。獲物はすぐさばき、ぼたん鍋にして仲間と一緒に食べた。ブタとは違い、こくがあり、野性のおいがする独特の味でうまい。

「きょうは大物だったな」など、巻き狩り仲間とイノシシ談議に花を咲かせながら食べる。それが何よりの楽しみだった。

ところが原発事故後、捕獲しても食べられなくなってしまった。放射能の数値がかなり高いのだ。せっかく捕った獲物を、国や県は食べずに処理施設などで処分しろという。

埋めたり焼却したりするためにイノシシ猟をするのではない。ハンター仲間の狩猟意欲は、急速に失われてしまった。

県内の狩猟登録者の数は、2011年度は3328人。震災がおきる前の10年度に比べ、いっきに1千人以上減った。3割減。その減少傾向は今も続いている。

佐久間はいう。

「お役所は、銃をもってるんだから捕獲に協力してほしいと簡単にいう。でもね、殺生だけなんて誰だってやりたくないですよ」

福島市は12年から1頭1万円の報償金制度を導入した。作業ごとの日当も定めた。

追い払い 1日2千円

調査観察 1日2千円

捕獲後の処置 1日5千円

まるでおたずね者の懸賞金のようなようだ。それでも、やろうという人は簡単には増えない。

ハンターを増やそうとするなら、山に入る教育から始めなければ危険だ。結局、本田や佐久間のようなベテラン頼みになってしまう。

イノシシは当然のごとく増加していく。

第5章 じわじわ上がる線量

福島県猟友会の佐久間貞二や本田義博が捕獲したイノシシは県の放射性物質調査の対象となる。

放射性セシウムは筋肉に蓄積しやすい。このため足など決まった部位の肉を採取し、福島市に仮庁舎を構える県原子力センターに送る。

センターは採取した日時や場所を記録し、ゲルマニウム半導体検出器にかける。1 キロあたりの放射性セシウムを1 日で測定する。

イノシシ以外にキジ、ヤマドリ、カルガモ、ノウサギ……。さまざまな野生動物の検体が毎月、40前後、運ばれてくる。

その中で地中の野菜や生物を食べるイノシシの数値は突出して高い。しかもじわじわと上がっている。この2年の記録をみると分かる。

▽2011年11月4日 5720ベクレル（相馬市）

▽12年7月2日 2万5千ベクレル（二本松市）

▽同11月20日 3万3千ベクレル（いわき市）

国が定めた一般食品の基準値は100ベクレル。イノシシの数値がいかに高いかは明らかだ。

国は11年以来、イノシシの出荷制限を出している。だが、問題がそれで片付いたわけではない。

13年3月4日、県自然保護課に原子力センターからメールが届いた。

2月22日に南相馬市小高区で捕獲されたイノシシの測定結果が5万6千ベクレルという報告だった。

さらに月末には、同市のイノシシから6万1千ベクレルが検出された。たて続けに最高値を更新してしまった。基準値の610倍。

自然保護課主幹の酒井浩（さかいひろし）（57）は驚きを隠さなかった。

「すでに出荷制限、消費自粛の対象となつてはいるが、数値がここまで上がってくると緊張します」

線量の高いイノシシがあちこちで出ることは、それだけ汚染域が広がっていることを示唆する。これから帰還する避難住民はもちろん、全県民に不安を与えかねない。

本田の捕ったイノシシからも高い放射線量が出る。原発から50キロ以上離れた福島市内で数百ベクレル、ときに1千ベクレルを越すこともある。

本田はいう。

「畑で何をつくっても放射能が出た、出ないという話になる。イノシシから出ても驚きはないですね」

原発事故の前は、猟から帰るとよく知人から肉を分けてほしい、と頼まれた。今はだれもほしいといわなくなった。

第6章 あれはイノブタだ

原発事故から約2カ月後の2011年5月4日、獣医師の森沢道明（もりさわみちあき）（68）は南相馬市小高区に入った。

20キロ圏内で放置された動物はどうしているか。国会議員や専門家で視察団が組まれた。県獣医師会の副会長だった森沢もそれに加わった。

長ぐつにマスクをし、マイクロバスに乗る。人の姿がなくなった田んぼの周辺や住宅街を進んだ。

と、山間部で十数頭のブタが歩いているのを見つけた。多くがメスのようだ。無人の豚舎から逃げ出したに違いない。

これは問題になる。森沢はそう直感した。

阿武隈山系には多くのイノシシが生息する。野生のイノシシとブタが交雑すれば、イノブタが繁殖するのは目に見えていた。

森沢の専門はウシやブタなど産業動物だ。家畜のことはよくわかっている。

イノシシの出産は年1回。1回に産む子どもは4～5頭だ。しかし、食肉用に改良されたブタは多産だ。イノブタは年2～3回で、1回に10頭産むというデータもある。交雑が始まると、野生のイノブタが急激に繁殖する恐れがあった。

視察から帰るや、森沢は県に連絡し、対策をとるよう求めた。

県はブタの捕獲を進めたものの、その後の対応は遅かった。

家畜であるブタは農林水産省、野生動物のイノシシは環境省の所管。交雑種のイノブタは、担当がまだ決まっていない。そんな理由ともいえない理由さえ聞こえてくる。

時間だけが過ぎていった。

ブタでもない。イノシシでもない。あれはイノブタだ――。

12年になって、こんな情報が富岡町や南相馬市に届き始めた。

茶色い毛に覆われて一見イノシシだが、耳がブタのように垂れている。ブタ並みに大型で、オスには牙がある、と。

今、県獣医師会長の森沢はいう。

「動物の問題は早め早めに手を打たないといけません。行政の動きが鈍かったのは、イノブタの増加という事実を認めたくないというのが本音だったのではないか」

問題は確かな情報が少ないことだった。県がイノブタを確認したのは2件。それ以外は「らしき動物」という表現だ。「増えているに違いない」という臆測が、不安との相乗効果で拡大していった。

人がいなくなった地域で、何かが起きていた。

第7章 大繁殖は幻か

2013年2月、住民の帰還が想定されている避難指示解除準備区域を中心に、イノブタ捕獲作戦が行われた。遺伝子を解析し、イノブタの繁殖を科学的に裏付けるためだ。

調査地域は田村市、南相馬市、川内村、楢葉町、飯舘村、広野町の6市町村。住民の避難で、無人となった農地が広がる地域だ。地元の猟友会が協力して罠（わな）をしかけ、2カ月で74頭を捕獲した。

事前に県獣医師会会長の森沢道明はこう警告していた。

「イノブタは繁殖力が強く、体格も大きい。農業再開の妨げになるほど繁殖する恐れがある」

県は調査をもっと早くやるつもりだった。しかし12年4月になっても予算化できず、やっと12月補正予算で認められた。国の復興予算の一環、ということだった。

捕獲された74頭は、外見はイノシシだった。採取した肉を研究施設にもちこんだ。

群れで捕獲されたものは代表の1頭に絞り、計62頭のDNAを評価した。その結果、広野町や楢葉町でつかまえた11頭に母親側から受け継いだブタ遺伝子が確認された。

これをどう評価するか。

専門家による検討会議が開かれたのは13年4月26日のことだ。会議は思わぬ方向に進んだ。

調査結果の紙にはこんな言葉が並んでいた。

「同タイプの遺伝子を持つイノシシは震災前から確認されている」

「震災後に逃走した家畜ブタとの交雑で生まれた可能性は低い」

要は震災後にイノブタが増えた実態はない、という結論だ。しかもブタとの交雑で生まれても、自然環境の中では繁殖率が高くなることはない。だから今回のイノブタ大繁殖説に根拠はない――。

幻でも見たのではないか、と言わんばかりの報告だった。

検討会議の委員の一人で、東京の野生動物保護管理事務所社長、羽澄俊裕（はずみとしひろ）（58）が発言した。

「これでは住民が安心するとは思えない。イノブタかどうかの確認に力を入れるのはいいが、それより野生動物の被害にどう対処するのかを考えるべきだ」

イノブタであろうがなかろうが、震災後、イノシシの出没が増えているのは間違いない。避難住民が帰還したとき、人の領域がイノシシに占拠されていたらどうするのか。それがもっとも懸念される問題だ、という指摘だった。

第8章 草原化する故郷

2013年6月12日、2台の車が福島県東部の国道6号を海沿いに南下した。作業車がときおり、ごう音をたててすれ違う。

車には、浪江町役場で鳥獣対策を担当する産業・賠償対策課の志賀隆寿（しがたかし）（25）が乗っている。それと県自然保護課の伊藤正一（いとうしょういち）（49）、環境省野生生物課の湯浅敏史（ゆあさとしふみ）（46）らだ。

車列は浪江町に入った。

浪江町は半分が福島第一原発から20キロ圏内の旧警戒区域で、約2万人が避難している。13年4月から帰還困難区域など3区域に再編され、8割の住民は昼間なら立ち入りできるようになった。

人間がいない間に増え続けてきた野生動物をどうするか。志賀らが町に入ったのは、行政の担当者がその実態を視察するためだった。

点在する家は静かで人の気配はない。田畑は雑草が伸び、荒れ放題になっていた。上空ではキジの鳴く声がする。一面、草原だった。

その草原のあちこちに、大きな穴があいている。イノシシが掘った跡のようだ。志賀はいう。

「人がいなくなり、イノシシの活動範囲が山から里に広がってきています。今の状態は彼らが住みやすい環境になってしまっています」

久しぶりに自宅を見に行ったら住民から、イノシシに荒らされているので何とかしてほしいという声が、役場には多数寄せられていた。

震災前、被害地域は里山が中心だった。今は浜辺に近い住宅付近の農地でも荒らした跡が見つかる。

町は将来の営農再開のため、イノシシを居住区域から押し戻したい。しかし放射線量が高く、捕獲作業をすることすら難しい。

大学時代をのぞき、ずっと浪江で暮らしてきた志賀はいま、郡山市に避難し、二本松市の仮庁舎まで通う毎日だ。復興を前進させたいが、日を追うごとに草原化がすすむ故郷の姿には胸が痛む。

「雑草も、今なら手で引っこ抜けますが、放置すれば重機を入れないと除去できなくなる。原野を一から開墾する状態になりかねません」

帰還困難区域は5年以上戻ることができない。その間に繁殖したイノシシがエサを求めて山を越え、県内全域へ広がっていく可能性もある。

とりえず環境省はイノシシの数と行動圏を調べるため、双葉町、大熊町を含む旧警戒区域内で捕獲し、発信器をつけることにした。

その後、どうするか。具体的には何も決まっていない。

第9章 何も残ってねえよ

「立ってる稲なんてなかったですよ」

福島県田村市の農林課長、門馬吉喜（54）がいう。

市の山間部にある農地の一画。2012年夏、そのうちの1アール分で農家に稲を試験栽培してもらった。放射能を分析するためだ。

12年10月15日、分析用に数キロを収穫した。そのときは、たしかに田んぼだった。しかし2週間後の11月2日、残りの稲は全てなぎ倒されていた。

土が掘り返され、その中で稲穂が泥まみれになっている。

米を収穫した後の10月末、門馬は農家に電話し、「残りは刈り取って倉庫にでもしまっておいて下さい」と伝えた。すると「何を刈れて？ 何も残ってねえよ」。それがこういうことだった。

一帯は福島第一原発から20キロ圏内で、3月までは警戒区域に指定されていた。現在は避難指示解除準備区域となり、13年夏から長期の宿泊もできるようになった。

住民が戻った時に営農が再開できるのか。米や野菜は放射性物質に汚染されていないか。そのために有効な対策は何か——。米の栽培はそれを確かめるための試験だった。

「米植えるのはいいが、イノシシにやられるぞ」

農家からはそんな声が出た。

試験が台無しにならないよう、水田を電気柵で囲んだ。イノシシが鼻で触れるとビリッと感電する。電流は弱い。が、驚かせて追い払うためのものだ。

10月に試験用の米を刈ったあと、電線を撤去した。その途端にイノシシが侵入し、残りの米を食い荒らし、稲を踏み倒したのだった。

「こうなるんじゃないかと思っていたがね」。門馬はあきらめたように笑う。

「以前も稲穂をかじるとか被害はあった。でも、これほど極端にやられた例は少ないです」

田村市は05年3月に5町村が合併して誕生した。以来、門馬はずっと農林関係を担当してきた。今も市役所2階の農林課にいる。

自分も家では米を作っている。田んぼに携帯電話は持ち込まず、田の作業に専念してきた。営農再開には人一倍の思いがある。

米の分析結果そのものは門馬を喜ばせた。ほとんど放射性物質が検出されなかったからだ。

しかし、泥だらけの田んぼの光景は無残だった。

第10章 しっぱ振り、目前に

田村市都路（みやこじ）町の農業、吉田修一（58）は2013年7月、畑でトマトを収穫していてイノシシに遭遇した。

気配にふと顔を上げたとき、すぐ先にイノシシがいた。

大きい。100キロはあろうか。石をぶつけても、スコップを振り回しても逃げようとしない。なんと、しっぱを振りながら迫ってくる。

「ザザザなんてもんじゃねえ。ドドドドって。競馬場の馬が走るみたいだった」

逃げ込んだのは、ジャガイモ畑を囲む電気柵の中だった。高さ60センチの電線をやっとの思いでまたいだ。激走するイノシシが2メートルにまで迫っていた。柵の中で携帯電話を取り出し、猟友会に連絡を取った。

「やっつけてほしいんだけど」

猟友会員が到着する前に、イノシシは茂みに消えた。

都路地区で農業を始めて40年になる。今は妻、息子夫婦と4人、6ヘクタールの田畑で米やトマト、スイカなどを作っている。

自宅は福島第一原発から「20キロと200メートル」にある。その200メートルのため、20キロ圏内の警戒区域には入らなかった。しかしとりあえず郡山市に避難。12年から通いでトマト栽培を再開し、米の試験栽培にも参加した。

昔、イノシシは見たことがなかった。増えたと感じたのは、この10年くらいだ。集落では、雪が少なくなったせいともいわれている。

「専門家じゃないからわかんないけど。連中は雪が苦手なんだって。雪が深いと歩けねえから」

原発事故が増加に拍車をかけた。感覚だけではない。環境省の調査も旧警戒区域周辺でイノシシの数が増えている恐れを指摘した。

これまで目撃がなかった地域でも報告が相次ぐようになった。都路の中心部では、民家で庭の水仙が掘られ、物置の米が食べられた。

イノシシは作物のなくなった畑で虫を掘り、泥を浴びた。水路もあぜもグチャグチャ。畑を除染したときは、でこぼこでトラクターがまともに走れなかった。

「俺らが避難している間に生まれたのは、人間の怖さがわかんねえで育ってんだよね。警戒心がなくなっちゃった」

イノシシの成長は速い。2歳で出産できる。事故当時は赤ん坊でも、もう大人だ。

そんなイノシシでも電気柵には近づかない。「これだけは怖いって分かってるみたいだ」

第11章 電気柵ぐるり300キロ

活動範囲をふくらませているイノシシについて、田村市農林課長、門馬吉喜は危機感を強めた。何もしなければやられてしまうぞ。

田畑のまわりに柵をつくるしかない。しかし、本格的な柵をつくろうとしたら何年もかかる。かんたんで効果がある柵。

「電気柵が一番かなと思ったね」

柵の費用は国の復興関連予算から出る。農家側の要望に対して資材を提供し、自分たちで設置する。

「この方法なら全域カバーできつから」

福島第一原発から30キロ圏内にある市内の農家に電気柵の設置希望を聞いた。集計すると、農地の面積は470ヘクタールとなった。

田村市の農地は山がちな地域にある。道路や川を避けると、一度に囲める範囲は小さくなる。計算していくにつれ、電気柵の長さはどんどん延びた。やがて、470ヘクタールすべてを囲むには電気柵の延長が300キロに達することが分かった。福島から東京までの距離より長い。

直径2ミリの電線を、上中下段に3本張る。上段は高さ60センチ、下段は20センチ。支柱は20万本と見積もった。電線には1秒に1度、数千ボルトの電圧がかかる。電気は車のバッテリーくらいの電池から供給される。

下段の電線まで20センチ。そのくらい夏草なら数日で伸びてしまう。草が電線に触れると放電するから、頻繁に草刈りや除草剤の散布をしなければならない。それができるのか。門馬は「適切な管理をお願いします、としか言いようがないね」。

だが、完全に管理できるのかどうか。門馬も確信を持ってない。

2013年7月28日、都路（みやこじ）地区で電気柵の取り扱い講習会が開かれた。イノシシと遭遇して逃げた吉田修一も参加した。

「電線は鼻で触らない限りはビリビリ来ないから。いきなりドーンと来たら効き目はねえ」

いつか柵を壊すイノシシが出てくる。直感で分かる。柵より、イノシシの数を減らす必要があるのではないか。吉田は近くの農家が狩猟免許を取り、罠（わな）猟を始めると聞いた。

吉田の電気柵の水田では、青々とした稲がまっすぐに伸びていた。他の農地についても、13年度中には柵の設置を終えるつもりだ。

「田んぼ、全部囲うよ。でも、なんていうかね、景観が不思議なんだよね。これが田んぼの風景かって。あんまりよろしくねえような気もするんだ」

第12章 山を離れたマタギ

マタギサミット。

2013年6月29日、福島・猪苗代町のホテルでこんな名の集会があった。

マタギとは、東北の山地などで狩猟をなりわいとする猟師のこと。マタギ文化の研究者で東北芸術工科大学教授の田口洋美（たぐちひろみ）（56）が始め、毎年開いている会だ。

今は猟だけで生活する人はほとんどいない。サミットは猟の愛好家が年に1度、狩猟技術の継承を考える貴重な場になっている。

全国から集まった愛好家や研究者は約150人。24回目の13年は初めて福島が会場となった。テーマは「東北の山で何が起きているか」。

最初に県自然保護課の伊藤正一が、この1年の野生動物の放射能汚染の現状を報告した。

イノシシやツキノワグマ、キジなどから検出された放射性核種が、394検体中275検体で基準値（1キログラムあたり100ベクレル）を超えていた。

現在、多くの狩猟者が山から遠ざかっている。

1980年代に1万5千人を超えていた福島の狩猟者は今では6分の1に落ち込んだ。60歳以上の割合が1割から7割になった。そこへ持ってきて原発事故だ。これでは動物と人との適正な共生が保てない——。そんな声が出た。

会場には奥羽大学の伊原禎雄（いはらさだお）（46）の姿もあった。福島で野生動物の実態を継続的に研究している。伊原にとって、事故後の動物たちの行動はずっと気がかりだった。

伊原は警戒区域の写真を示した。

近づいても路上から逃げないイノシシ。車が来ても道路わきで平然とエサを食べる群れ——。まるでサファリパークのような状態だ。

伊原は強調した。「駆除の圧力がなくなったためだ。このまま狩猟者が減れば、近い将来、野生動物との軋轢（あつれき）が各所で深刻化する」

23年前、田口がサミットを始めたのは、動物と共生する狩猟文化を継承したいという思いからだった。

「食べて保全」とよくいわれた。人と動物の双方の生活を保持するため、最低限の捕獲をする。それがマタギ文化の考え方だ。

サミットの人脈を通じてイノシシやシカなど増加する動物を捕獲し、NPOが肉を売って地域の活性化に役立てる。田口はそんな案を提唱している。それを東北各地で具体化させようと思っていた。

そこへ原発事故が起きた。計画は頓挫した。

第13章 線量計を付けるには

獣医師の溝口俊夫（みぞぐちとしお）（66）は、福島で野生動物の保護にかかわって30年になる。大玉村にある県鳥獣保護センターの専任獣医師として、動物の治療をしてきた。

2012年暮れ、溝口のもとに県自然保護課から連絡があった。

「野生動物と放射能について、IAEA（国際原子力機関）と一緒に調査をすることになった。その責任者になってほしい」

溝口はもともと、横浜国立大でシステム工学を学んでいた。

大学を出たころ、近所の八百屋からかわいい子猫をもらった。その子猫がぜんそく持ちだった。猫のために東京から栃木に引っ越す。するときれいに治ってしまった。環境と生命の深いつながりを思った。

よく行く動物診療施設で偶然、子牛の哺乳を体験する機会があった。手に生命を感じた。どうしても動物とかかわる仕事をしたくなる。

岐阜大の獣医学科に入り直し、34歳で獣医師になった。今では年に数百頭の野生動物を治療する。

実は溝口は、県の打診の前からすでに動物の放射能検査を始めていた。野生動物の被曝（ひばく）が気になったためだ。駆除されたイノシシやツキノワグマなどの肉の一部を、協力してくれる大学に送り、放射性セシウムなどの量を調べてもらっていた。

IAEAと連携するのは、原発事故の動物への影響を世界に発信するよい機会だ。しかし放射能の影響は30年以上続く。短期間では意味がない。次世代に引き継ぐ必要がある。

溝口は県に提案した。

チームを二つにつくってはどうか。一つは40代以下の若手グループ。もう一つは自分を含む世代が中心。若いチームが実動部隊となり、上の世代が意思決定する。

これが認められた。プロジェクトは2層態勢で発足した。調査は日本側が主導し、IAEAの助言をもらうというシステムだ。

さっそく13年夏、二本松市でイノシシを何頭か捕獲し、首に発信器をつけた。生息環境と汚染の関係を解明していくつもりだ。

さらに溝口は、イノシシに線量計を取り付けるのはどうかと考えた。人が入れない場所の放射能を調べることができる。イノシシに線量マップをつくらせるのだ。

問題は、そんな装置がつくれるかどうかだ。首輪をつくっても、イノシシには犬みたいな首がない。

そんなとき、助っ人が現れた。

第14章 即座に「やろう」

2013年3月5日、福島市。獣医師の溝口俊夫（66）ら福島県関係者が、長野県塩尻市内の企業の代表らと会っていた。

5年前、塩尻では中小企業が中心になって「ITアグリ研究会」を発足させていた。目的はITを使った農業活性化で、イノシシの捕獲で実績をあげていた。そんなとき、人づてに聞いたのが福島でのイノシシ被害。福島県側に「力を貸したい」と申し出た。

専門分野では全国的に名を知られた優秀な企業ばかりだ。溝口は具体的に要望した。

「われわれがほしいのは、イノシシにつけられる小型の線量計と、その情報を受信する技術です」

研究会の会長でソフトウェア開発の信越ソフトウェアエンジニアリング社の会長、坂本一行（さかもとかずゆき）（65）たちは即座に答えた。

「やってみましょう」

関連する企業が集まってチームをつくり、ただちに開発に着手した。

実は溝口は当初、それほど期待していなかった。互いに全く知らない土地の人間同士。企業人が自分たち以上に何を知っているのか――。

ところが、集まった企業の本気度は驚くほどだった。被害に悩む農家の声に、真剣に耳を傾けていた。

13年4月には塩尻市で2回目の会議を開く。その日夜、溝口ら福島の代表と社長たちが市内で酒を酌み交わし、「やろうぜ」と誓い合った。

試作品は13年8月に完成した。

発信器付き首輪は、無線機器開発会社のサーキットデザイン社が作った。700グラムと軽量で、半年のデータを蓄積できる。線量計はスキャナーを扱うアイメジャー社がチューインガム大の小型のものを提供した。

データを受信するため、無人飛行機をもつ情報通信研究機構も紹介してくれた。

もちろん課題はある。

イノシシが泥をかぶったら線量計が誤データを測定しないか。首輪が外れてしまわないか。試作品は、13年秋にもイノシシに着ける予定だ。

溝口はいう。

「成功すれば人間が入れない所でもイノシシが放射能の線量地図を作ってくれる。ふだんは悪者扱いですが、彼らは自然の異変を身をもって教えてくれる貴重な生き物です」

研究会の事務局を担当する塩尻市振興公社の林茂（はやししげる）（63）はいう。

「どの企業も利益を度外視してやってくれています。いま日本に必要なのは絆ですから」

第15章 人間が加害者なんだ

麻布大学教授の高槻成紀（たかつきせいき）（63）は、野生動物と人間の共存という視点で研究している。

2012年9月、溝口俊夫に会った時のことをよく覚えている。大学で開いた日本哺乳類学会の大会へ招き、原発事故と野生動物について講演してもらった。

溝口は、動物に蓄積された放射能の測定結果をもとに、獣医師の現場から影響を鋭く警告した。

高槻は講演後、「何かお手伝いできることがあればいつでも連絡してください」と声をかけた。

3カ月後、溝口からメールがきた。「IAEA（国際原子力機関）とイノシシの調査をするので協力してほしい」

高槻は迷わず引き受けた。

鳥取出身の高槻は東北大学でニホンジカの生態研究に没頭した。東大の教授を経て、6年前から麻布大で保全生態学を教えている。

東北は研究生生活の半分以上を送った地だ。阿武隈山系の自然の美しさはよく知っている。原発事故直後から、何か貢献できないかと思っていた。

まずは食べ物と被曝（ひばく）との関係などを調査していく。

高槻はチェルノブイリ事故のデータを調べてみた。体内被曝でみれば、シカの数値は年を追うごとに低下する。ところがイノシシは下がらない。逆に上がった例すらある。放射性物質は年とともに地中に浸透していく。現在は地下10センチ程度のところに高濃度の層がある。イノシシは、その地中約10センチに育つきノコを掘り返して食べていた。

日本でも、イノシシの数値は上がる傾向にある。こうした調査を幅広くやれば、環境への放射性物質の影響を予想する手がかりになる。

継続的に追うなら、今からでも遅いくらいだった。

13年8月1日、IAEAプロジェクトの専門家会議が福島県であった。

動物の肉が食べられない。モニタリングの継続が必要——。高槻は県の説明を聞いて、どこか人間中心の身勝手さを感じた。

高槻は自分の考えを述べた。

「動物を食べ物として見るだけでなく、人間が自然の破壊者だという視点が大切だ。その反省の上で何を世界に発信するかを考えるべきだ」

目先の成果も大事だが、地球史的な長い目で記録を残す意味を確認しておきたかった。高槻は「動物にとって、私たちは加害者なんです」といった。

第16章 人と獣の力関係

原発事故の後、全町民が避難している福島県富岡町。そこで2013年6月初旬、1枚の写真が撮影された。道路上に広がる獣たち。ブタのように腹がふくれて耳がたれ下がっている。背後には子どもらしき群れ。イノシシよりはるかに大きい。その巨体は今にもこちらへ向かってきそうだ。

南相馬市の県猟友会小高支部長、高橋一夫（たかはしかずお）（64）はいう。

「こんなイノシシはいねえ。イノブタだ」

高橋は狩猟歴43年。南相馬で捕獲したイノシシは100頭を超す。その高橋の目から見ても、こんな獣の集団は異様だった。

撮影したのは、高橋の猟仲間で、同じ歳の猟友会員だ。福島第一原発から10キロ弱の距離にある富岡町の夜の森公園近くに住んでいたが、今はいわき市に避難している。

その猟仲間が車で一時帰宅し、帰り道、車で人気（ひとけ）のない公園前にさしかかった時だった。「イノブタ」の群れに行く手を阻まれた。動かず、こっちを見ている。思わず携帯で写真を撮った。車を接近させていくとようやく立ち去った。

福島県が「イノブタの大繁殖はない」という結論を出してから、1カ月余りたっていた。

高橋は「何が繁殖してねえだ。これが動かぬ証拠よ。放っておくとどんどん増える。子を守るため人間に何すかわかんね」。

震災後、富岡町などの警戒区域では家畜のブタ約3万頭が放置され、多くが「放れブタ」になった。県はうち約3300頭を捕獲、安楽死処分し、これ以外に約1万3千頭が死んだのを豚舎で確認したという。

残り約1万4千頭がどうなったか。県は死んだと判断しているが、何頭が逃げ、野生化したのか、十分な確認はできていない。

新世代イノシシ――。

人を怖がらず、夜行性だったのに白昼堂々とのし歩くようになったイノシシを、そう呼ぶ人もいる。

イノシシの子どもは母親について回る。親が逃げなければ子も逃げない。人と獣の力関係が原発事故をきっかけに急変しているというのだ。

人は再び自分たちの土地に住めるのか。イノブタやイノシシの増加は、原発事故でいったん失われたものを取り戻すことがいかに難しいかを突きつけている。

プロメテウスの罠〔34〕 イノシシ膨張「人間が自然の破壊者なんだ」

著 者 朝日新聞（前田史郎、小坪遊）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2013年9月6日 WEB新書版発行

2013年12月31日 EPUB版発行

©2013 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-115-8

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2013年9月6日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。